

ては今日ほとんど明らかにされていない。そこで、海氷を含む海洋モデルを作成し、海水の消長による熱フラックスの変化によって北極海の循環がどのように変化するか、また、現実の北極海の平衡がどのような機構によって維持されているかを明らかにする。

4. 年次計画

(1) 南極域観測計画

1979年から1981年まで(第20次南極観測～第22次南極観測)の3カ年を予定している。1979年には氷床域の接

地層および放射収支の観測に重点を置き、1980年には逆転層の構造、大気循環および海氷域の熱収支の観測に重点を置く。1981年には主として広域の気象観測を行なう。

(2) 北極域観測計画

前述のように、1979年の夏期および1980年の冬期を予定している。

(3) 数値実験

1979年度はモデルの開発に力を入れ、1980年度に主力を置く、1981年度はまとめのための計算や解析を行なう。



飯田陸次郎 著

山の天気を知る法

実戦・観天望気

東京新聞出版局, 1977, 12.5×18, 159頁, 1300円。

登山にとって、好天時のすばらしさと悪天時の悲惨さは、まさに天国と地獄の差です。

装備や登山技術などの高度化による、より一層困難な登山が可能であっても、自然の猛威、特に気象という自然の猛威には、人間はとも勝てないようです。

しかし、私達は、登山中、天気図を書いたり、観天望気により、いち早く悪天の襲来を予知し、悪天から身を守り、つぎの時点における登山の成功を期待しているわけです。

天気図による天気の予想には、現在では、いろいろと制約もあって困難な点もありますが、登山しながら、観天望気により、数時間先の天気を予想して、行動し、登山計画を遂行し得たら、きっとすばらしい登山体験になるでしょう。

1978年6月

本書は、著者の豊富な登山歴と気象学の研究が一緒になり、すばらしい動画的写真構成により、雲の変化・悪天への変化を順序よく、観天望気の基礎知識を実例によって、教えてくれます。

特に、好天時に発現した雲の見方の説明から始めて、悪天への変化までの順次の変化写真とその説明は、著者自身の体験であり、好天時から悪天時まで、雲の変化を写し続け、おそらく最終的には、著者自身が悪天の猛威の中にまきこまれながら下山したものだと思います。

このような、観天望気に対するしつようなまでの努力の結果といえる本書は、単に登山者ばかりでなく、屋外レジャーを楽しむ人々にとっても、貴重な教本であり、かつ、雲の変化によって天気を予知するという科学を、私達の日常生活にも取り入れたら、生活そのものが、より楽しくなるものと思います。

私にとっては、著者は、気象界も登山界においても大先輩であります。著者のなみなみならぬ努力によって、すばらしい教本を出版されたことに対し、私の浅学を恥じながら敬意を表します。

この本は、適当に小さく、写真もすばらしいので、毎回の登山行には、ぜひ、キスリングの中に入れて行き、テントの中で山仲間と話し合いの中に、貴重な話題を提供してくださると思っています。

(庄司 亮)